

女は憂鬱な顔の下から、いつもの神経質な目を輝やかして、別に驚きもせず、むしろ愛嬌笑ひをしながら、圍爐裏に焚火を盛んにくべて、熱いお茶をのませたりした。

お正月だから田舎では舊なのだけれど、女はハデな羽織を着てゐた。猫もかちけてゐるのか姿を見せない。

即現佛

—— 身得度者。

火鉢にさしてある火箸を持つて、僕は木刀の漏斗を叩きながら、いつもの観音經をやり出した。端座瞑目して、即身成佛するものの如く、まじめに懸命に、周邊の食物や女に氣をとられないで、がんにやり出したのだ。

叩く手が痺れて来る。

それでも一本の火箸の端を、軽く持つか持たないか位に持つて、ピシ／＼と丸い漏斗を打つのだ。左の手では木刀をぐる／＼廻す。

ををしないと漏斗の一所丈が凹んで、終ひには割れて了ふかも知れない。

鈴やかなリンの音の如くでもなく、又ツリ鐘の如く太くボケてもゐない、其の中間位の好い音